様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：２３３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５８７０１６１

研究課題名（和文）西洋近代における「崇高」の思想史：美学および関連諸学への領域横断的アプローチ

研究課題名（英文）History of the "Sublime" in the Modern West: An Interdisciplinary Approach to Aesthetics and other Disciplines

研究代表者
星野　太（Hoshino, Futoshi）

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・講師

研究者番号：８０６４６２０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題「西洋近代における「崇高」の思想史：美学および関連諸学への領域横断的アプローチ」は、西洋近代における「崇高」概念の成立と変貌を四年間にわたって研究・調査し、美学のみならず、哲学・詩学・修辞学などにまたがるこの概念の思想史的な広がりを明らかにした。その最大の成果は、古代のロンギノスによる『崇高論』を批判的に継承したドゥギー、ド・マン、ラクー＝ラバルトらの議論を精査することで、そこから言葉と崇高をめぐる新たな問題を見いだしたことにある。本研究期間中においては、その成果の一端を著書（1件）・編著（1件）・論文（4件）・口頭発表（8件）として公表した。

研究成果の概要（英文）：This research project, "History of the 'Sublime' in the Modern West: An Interdisciplinary Approach to Aesthetics and other Disciplines," focused on the "sublime" in the modern west, especially in Aesthetics and related fields such as Philosophy, Rhetoric and Poetics. We have worked on the authors such as Michel Deguy, Paul de Man and Philippe Lacoue-Labarthe, while examining their deconstructive readings of Longinus' treatise on the sublime in the 1st century. Through the four-years research project, we published two books (including one co-edited book) and twelve papers in academic journals and international conferences.

研究分野：美学

キーワード：崇高　美学　修辞学　ロンギノス　ド・マン　ドゥギー　ラクー＝ラバルト

１．研究開始当初の背景

近代美学における「崇高」は、一般的にカントの『判断力批判』（1790）の成立をその起源とする。そのため、従来の「崇高」をめぐる思想史的研究の多くは、これまで主にカントに対する綿密な注釈によって成り立っていた。それにより、従来の「崇高」をめぐる研究の多くはしばしばそれを「恐怖」や「抽象」と結びつけ、非感性的なものの「否定的表出」としての性格を強調してきたという経緯がある。

これに対し、それまで支配的であったロマン主義的な「崇高」の理解から逃れ、それを文学・修辞学・倫理学・政治学といった多領域にまたがる問題として捉えなおそうとする研究動向もまた存在する。これは偽ロンギノス（以下「ロンギノス」）の『崇高論』（紀元 1 世紀頃）や、ニコラ・ボワローの『崇高論注解』（1674）といった古典的な文献の読みなおしに始まり、ヘーゲルやシラーといった、カント以降の「崇高」の伝統に非ロマン主義的な読解を施そうとするものである。

２．研究の目的

本研究は、前述の二つのうちの後者の動向、すなわち「崇高」の領域横断的な研究に連なるものである。とりわけ、相対的に研究が進んでいる文学や倫理学との関わりばかりでなく、それに隣接する修辞学や政治学の議論も見据えつつ、「崇高」概念を哲学的・思想史的に検討する点に本研究の最大の特色がある。このような研究は、ミシェル・ドゥギーやバルディーヌ・サン・ジロンらの業績によって注目を集めつつあるものの、世界的に見てもいまだこれに類する研究はほとんど存在しない。その最大の理由は、前述の通り、従来の「崇高」をめぐる議論がロマン主義的な解釈へと強く傾いていたからである。

以上の歴史的経緯を踏まえつつ、これまでもっぱら近代美学上の概念として検討されてきた「崇高」を、より広く近代の精神史のなかに位置づけることが、本研究の最大の目的である。

３．研究の方法

本研究では、主に次の二つの問題に取り組んだ。すなわち（A）18 世紀ヨーロッパにおける「美学」の成立と「崇高」概念との関係、そして（B）20 世紀アメリカ・ヨーロッパにおける「崇高」論の再興と同時代の理論との関係を明らかにすることである。

この二つの研究目的は互いに連動するものであるため、これらの問題をつねに並行して扱い、順次その成果を論文として公表した。その上で、「近代」という時代すべてにまたがる「崇高」概念を包括的に論じた著作を最終年度に刊行することを最終的な目標とした。

本研究の具体的な方法は地道な文献の読解が基本となるが、その過程で国内外の専門家に意見を求め、万全を期したうえで研究成果を公表した。

４．研究成果

（1）本研究課題の初年度にあたる平成 25 年度は、18 世紀の「美学」成立期前後における「崇高」の概念の変遷をめぐる思想史的な研究を行なった。そこで具体的に明らかにしたのは、ロンギノスに端を発する修辞学的な「崇高」の系譜と、18 世紀以降に勃興した美学的な「崇高」の本質的な交錯関係である。

以上の問題設定に基づきつつ、本研究では、17 世紀のボワローによる『崇高論』の翻訳・注解（1674）、エドマンド・バークの『崇高と美の観念の起源』（1757）、さらに『判断力批判』（1790）をはじめとするカントのテクストを検討した。それによって本研究が試みたのは、黎明期の美学において「崇高」という概念が占めていた位置を明らかにし、さらにその背後に潜む「美学」と「修辞学」の関わりについて検討することである。

さらに以上の研究と並行して、20 世紀において新たな展開を見せた「崇高」概念の内実を詳らかにすべく、ミシェル・ドゥギー、フィリップ・ラクー＝ラバルト、ポール・ド・マンらによる 1980 年代のテクストを検討した。

（2）本研究課題の 2 年度目にあたる平成 26 年度は、前年度までの研究を踏まえ、美学および修辞学における「崇高」の概念について、具体的なテクストに即した研究を行なった。前年度の研究が、18 世紀を中心とする古代から現代までの「崇高」の思想史に焦点を合わせたものであったのに対し、同年度の主な研究課題は、それを古代および現代における特定のテクストを対象としつつ論じることであったと言える。

その第一の成果としては、研究代表者が以前より取り組んでいるロンギノスの『崇高論』研究において、いくつかの新たな知見を示すことができたという点が挙げられる。同年度に発表した論文において、古代修辞学における「崇高」と「オイコノミア（エコノミー）」概念との関連を詳しく論じたことが、その具体的な成果である。

また、第二の成果としては、同じく研究代表者が継続的に関心を寄せているジャン＝フランソワ・リオタールの「崇高」概念を、より広いパースペクティヴのもとに位

置づけることができたという点が挙げられる。
以上の成果の一部は、研究代表者が海外において組織した国際シンポジウム等で発表された。

（3）本研究課題の 3 年度目にあたる平成 27 年度は、これまでの研究を踏まえ、大杉栄とリオタールにおける「崇高」概念の研究に努めた。とりわけ同年度は、過去 2 年間の研究成果を論文ないし口頭発表として公表し、国外の研究者とのさらなるネットワークを構築することに注力した。
その第一の成果として、ゲント大学（ベルギー）で行なった昭和・大正期の「崇高」概念に関する講演が挙げられる。近代の日本における「崇高」概念の受容を明らかにしたこれらの講演を通じて、同大学のメンバーとの共同研究の可能性が開けたことは、同年度における大きな成果であった。
また、第二の成果としては、同年の 12 月に東京大学駒場キャンパスで「Literary Figures」という国際シンポジウムを組織したことが挙げられる。このシンポジウムは、以前より研究代表者が共同研究を行なってきたソフィア大学（ブルガリア）と東京大学の共催によって実現したものである。このシンポジウムを通じて、本研究の中核をなす「崇高」の問題を（文学をはじめとする）隣接領域へと広げる展望が開けてきたことは大きな成果であった。
また、同年度においては、前年度に開催した国際シンポジウム「The Sublime and the Uncanny」の成果を発展させ、これを一冊の論文集として刊行した。

（4）本研究課題の最終年度にあたる平成 28 年度は、これまでの研究を総括し、今後のさらなる発展へと繋げるべく、国内外において過去 3 年間の研究成果を発表することに注力した。
まず国内においては、本研究課題の総括となる単著『崇高の修辞学』（月曜社）を出版し、さらに関連する講演等を通じて研究成果の公表に努めた。これにより、本研究課題が目的とする（主に西洋近代における）「崇高」概念の領域横断的な研究の成果を、広く周知することができたと思われる。
また国外においては、新ブルガリア大学およびソフィア大学（いずれもブルガリア）において「Philosophy's Imagination」という国際シンポジウムを組織し、海外の研究者との意見交換の機会とした。研究代表者による同シンポジウムの基調講演では、昨年度の成果物である論集『The Sublime and the Uncanny』を紹介し、この成果を今後のさらなる発展へと導くための糸口とした。これらにより、本研究課題が目的とする「崇高」概念の国際的・領域横断的な研究調査のネットワークを構築するという目標は、おおむね達成されたと言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① Futoshi HOSHINO, “The Sublime and Capitalism in Jean-François Lyotard,” *The Sublime and the Uncanny,* UTCP, March 2016, pp. 17-40.（査読あり）

②星野　太「（非）人間化への抵抗：リオタールの「発展の形而上学」批判」『現代思想』第 44 巻 1 号、2015 年 12 月号、160-172 頁（査読なし、招待あり）。

③ Футоши Хошино, “Възвишеното и капитализмът при Жан-Франсоа Лиотар,” *ЛИТЕРАТУРЕН ВЕСТНИК*, vol. 10, March 2015, pp. 6-7（査読なし、招待あり）.

④星野　太「修辞学における「エコノミー」：実践・配置・秩序」『ニュクス』第 1 号、2015 年 1 月号、60-71 頁（査読なし、招待あり）。

〔学会発表〕（計 8 件）

①Futoshi HOSHINO, “The Sublime and the Uncanny,” *Philosophy's Imagination,* Sep. 22, 2016, Sofia University (Sofia, Bulgaria).

② Futoshi HOSHINO, “The Sublime Community: Osugi Sakae or Rhetoric of Anarchism in Modern Japan,” *Religion and State in Japanese Philosophy,* Feb. 20, 2016, The University of Tokyo (Tokyo, Japan).

③Futoshi HOSHINO, “Japanese Aesthetics in Meiji Period (1868-1912),” Invited Lecture, Nov. 26, 2015, Ghent University (Ghent, Belgium).

④Futoshi HOSHINO, “French Philosophy in Japan during Taisho Period (1912-1926),” Invited Lecture, Nov. 25, 2015, Ghent University (Ghent, Belgium).

⑤ Futoshi HOSHINO, “The Sublime and Capitalism in Jean-François Lyotard,” *The Sublime and the Uncanny,* March 4, 2015, Sofia University (Sofia, Bulgaria).

⑥Futoshi HOSHINO, “Materialist Aesthetics: Bourriaud, Harman, Rancière,” *The Sublime and the Uncanny,* March 2, 2015, Sofia University (Sofia, Bulgaria).

⑦星野　太「リオタール再読：資本主義と人類の彼方」、UTCP シンポジウム「新たな普遍性をもとめて」2015 年 1 月 24 日、東京大学駒場キャンパス（東京都目黒区）。

⑧星野　太「放物線状の超越：ミシェル・ドゥギーと「誇張」の詩学」、UTCP レクチャー・シリーズ「思考のレトリック」2013 年 4 月 26 日、東京大学駒場キャンパス（東京都目黒区）。

〔図書〕（計 2 件）

①星野　太『崇高の修辞学』月曜社、2017 年 2 月、全 288 頁。

②Futoshi HOSHINO and Kamelia Spassova (eds.), *The Sublime and the Uncanny,* UTCP, March 2016, 150 pages.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

http://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/publications/2016/04/the_sublime_and_the_uncanny/index_en.php

６．研究組織

(1)研究代表者

星野　太（HOSHINO, Futoshi）

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・講師
研究者番号：80646208